

筆屋の夫婦

筆売りの夫婦がいた。ある村にやってきて、書堂に入ると、ちょうどその日が一冊の本を読み上げたお祝いの日だったから、先生と生徒がお餅をまえにして、食べようとしていた。先生は、筆売りが入ってくると大変いやな顔をした。とにかく人柄が悪くて、けちな先生だったから、餅をやりたくない。そこで、先生は筆売りと賭をした。問題をひとつ出して、答えられれば餅ひとつ、答えられなければ追い出すというんだ。

まず先生が話した。

「我之頭中有万斤詩書、李敷之金敷之、成不成我不問」

すると筆売りの夫が答えた。

「我之背中有紙筆墨、李買之金買之、立不立我不問」

つぎに筆売りの女房が答えた。

「我之腹中有子宮、李許之金許之、成不成我不問」

これを聞いた先生は、しかたなく夫婦に餅を差し出したんだって。

(語り手：南舜朝・1910 生まれ)

コメント：「筆屋の夫婦」は、日本の「和尚と小僧」にも似た知恵ばなしである。女房の答は、ちょっとエロチックで、行商人たちに対する村人の意識がうかがえる。この話だけが、具体的な地名にむすびつかないが、きっと村の漢文の先生とイメージを重ねてみてもよいのだろう。語り手の南さんは、かつて村の書堂にかよっていて、いまでも孟子などを諳んじることが得意である。南さんにかぎらず、この村の年寄りたちは、きわめて達筆な人が多い。